

## バーネットと『小公女』

——若松賤子、藤井白雲子の翻訳との関係を中心に

川戸道昭

イギリス生まれのアメリカの作家フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924) は、彼女の五十年近くに及ぶ作家活動を通して、小説四十数編と戯曲数編を残している。その中でとくに日本とつながりの深い作品は、『小公子』 (Little Lord Fauntleroy, 1886)・『小公女』 (A Little Princess, 1905)・『秘密の花園』 (The Secret Garden, 1911) の三点である。それらの作品が日本の読者からどれほど深くかつ永く愛好された作品であったか、そのことを確認するために、三つの作品のなかでも最初に出版された『小公子』を例に受容の経過を簡単にたどってみよう。『小公子』が日本の読者にはじめて紹介されたのは、アメリカで出版されたわずか四年後の一八九〇 (明治二三) 年のことであった。紹介の労をとったのは明治二十年代きつての女流翻訳家・若松賤子。最初『女学雑誌』に連載されたその翻訳は、一八九七年に一冊にまとめられて博文館から発行される。同書は、一九〇四年には十一版、一九一八年には三十四版を数え、一九二七年にいたって、岩波文庫に収録される。その岩波文庫の『小公子』は太平洋戦争を挟んで一九五〇年には十七刷を数え、さらに最近になってリクエスト版として蘇るというように、明治・大正・昭和・平成ととぎれることなく人々に読み継がれてきた一大ロングセラーであった。『小公子』の訳は若松賤子の訳以外にも数多く存在するところから、それらの翻訳も含めると、日本の児童文学で『小公子』ほど長期間人々に親しまれた作品はほかにないといってもいいほどの児童文学中の「古典」であった。

『小公女』と『秘密の花園』の場合は、若松賤子の『小公子』に匹敵するような超特大のベストセラー作品は存在しないが、その時代時代に何種類かの翻訳が発行され、それが読み継がれるというかたちで、多くの日本の読者に受け容れられてきた。双方の作品が日本の土壌に根をおろしていくまでの経過を概観するために、明治以降、太平洋戦争が終結する一九四五年頃までの

主な翻訳作品をあげてみると、次のようなものがある。

### 『小公女』

- 一八九三（明治26）年 若松賤子訳「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事」『少年園』（九月から翌年四月まで連載）。一九〇三（明治36）年、桜井□村編『忘れかたみ』に「セイラ、クルー物語」として収録。一九〇四（明治37）年 英和対訳 『セイラ、クルー物語』として内外出版協会から刊行。
- 一九一〇（明治43）年 藤井白雲子訳「小公女」『婦人くらぶ』。同年一〇月、聚精堂から同じ訳題で刊行。
- 一九二四（大正13）年 佐々木茂索訳『小公女』 東光閣
- 一九二七（昭和2）年 菊池寛訳『小公女』（小学生全集 第五六巻） 文芸春秋
- 一九三三（昭和8）年 岩下小葉訳 小公女物語 『屋根裏の王女』（児童図書館叢書）
- 一九三九（昭和14）年 水島あやめ著『小公女』 大日本雄弁会 講談社
- 一九四〇（昭和15）年 伊藤整訳『小公女』 主婦之友社

### 『秘密の花園』

- 一九一七（大正6）年 岩下小葉訳『秘密の花園』 実業之日本社
- 一九一九（大正8）年 田中純訳『秘密の庭』（世界少年文学名作集 第五巻） 家庭読物刊行会
- 一九四一（昭和16）年 清水暉吉訳『秘密の園』 朝日新聞社

『小公女』も『秘密の花園』も『小公子』に比べると翻訳された作品の数は少ないが、それでも『小公女』七点、『秘密の花園』三点と他の児童文学作品に比べて決して決して見劣りのしない点数となっている。原作が発行されてから翻訳が発表されるまでの時間という点からみても、『小公女』の原作がアメリカで刊行されたのは一九〇五年のことで、藤井白雲子の翻訳の出版は一九一〇年であったから、原作の五年後には日本の読者がその翻訳を手にすることができたということになる。『秘密の花園』の場合も、原

作と本邦初訳の出版の間には六年の隔たりしか認められない。つまり上記の作品は、三作とも原作の発表に遅れること五、六年の差で、日本の読者のもとに紹介されたことになる。

これらの作品のうち『小公子』に関してはこれまでいろいろな研究書などに取り上げられてきたし、わたし自身も「明治の児童文学 翻訳編」の『パーネット集』（五月書房、一九九九年）のなかで一通りの解説を試みたのでそちらを確認していただくとして、ここでは今までほとんど取り上げられなかった『小公女』についてその歴史的意義を考察してみることにする。そのなかでも、とくに明治期に出版された若松賤子の「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事」と藤井白雲子の『小公女』という二つの作品について若干の考察を加えてみることにする。

そこで、まずは、先のリストの最初に掲げられている若松賤子の翻訳の検討からはじめると、この作品はその後に出版された『小公女』の翻訳とはやや異質な作品であった。それは、「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事」（以下「セイラ、クルーの話」と表記）というように、この作品だけ他とは異なる題名になっていることから推察できるだろう。今日一般に使用されている『小公女』という表題を最初に用いたのが、『小公子』の名付け親である若松賤子ではなくて、翻訳リストの二番目に掲げられている藤井白雲子であったということに意外の感じを懐く人は少なくないと思うが、実は、そのことには一つ大きな理由があった。パーネットの原作そのものが、「セイラ、クルーの話」と『小公女』という二種類のものに別れていたのである。そのことをもう少し詳しく説明するために簡単に原作の出版経過をたどっておくと、アメリカにおいてセーラ・クルーの物語が最初に公表されたのは一八八七年のことであった。原題を *Sara Crew, or What Happened at Miss Minchin's*（以下 *Sara Crew* と表記）といひ、有名な『セント・ニコラス誌』（*St. Nicholas Magazine*）に掲載された。パーネットは、さらにその作品をドラマ化して、一九〇二年のクリスマスから翌年の一月にかけてロンドンとニューヨークの舞台にのせる。 *A Little Unfairy Princess* と題するその演劇が大好評を博したことから、今度はそのドラマ化されたストーリーをもとに、もう一度セーラ・クルーの物語を作り替えて、 *A Little Princess, Being the Whole Story of Sara Crew Now Told for the First Time*（以下 *A Little Princess* と表記）という作品を一九〇五年に英米の出版社から発行する。つまり、劇化されたものまで含めるとセーラ・クルーの物語には合計三種類のものが存在したことになり、最初の *Sara Crew* を訳したのが賤子の「セイラ、クルーの話」で、最後の *A Little Princess* を訳したのが白雲子の『小公女』であったというわけである。賤子は原作の *Sara Crew* をそのまま訳して表題とし、白雲子は、賤子が *Little Lord*

Faulteroy を『小公子』と訳した先例に倣って、*A Little Princess* を『小公女』と命名した。それが、賤子と白雲子のそれぞれ異なる訳題が生まれた背景である。

賤子の「セイラ、クルーの話」が『少年園』に発表されたのは一八九三（明治二六）年九月から翌年四月にかけてのことであったから、やはりその翻訳も原作の発表から六、七年ののちには出版されていたことになる。原作の *Sara Crew* と *A Little Princess* の違いを確認するために、以下に若松賤子の翻訳と藤井白雲子の翻訳の冒頭部分を、それぞれ原文とともに掲げてみることにする。

【若松賤子訳「セイラ、クルー」】

《一番最初から話しをし升と、ミンチン女史といふは、ロンドン府に住居をした人でした。其住宅は、東京でいふと、銀座通りの様な、大きな趣味のない建列たてなみの中にも、いと大きく、高く趣味のない家でした。尤も此界限の家居は、どれもくも同じ様で、軒の雀さへ殊さら揃ろへたかの如く同じ型かたでした。門かどに案内を請ふ為の木槌さへ同じドツシリした音に響き、静かなる日には、と申た処が静かでない日は至つて稀でしたから、一軒に案内呼ぶ音がすれば、建列の家中悉く反響こだまにひびく位でした。ミンチン女史の住居の戸には黄銅しんちゆうの板が張つて有つて、其板の上に、黒き文字で、

ミンチン女塾  
特に貴女の需に応ず

として有升た。》

In the first place, Miss Minchin lived in London. Her home was a large, dull tall one, in a large, dull square, where all the houses were alike, and all the sparrows were alike, and where all the door-knockers made the same heavy sound, and on still days—and nearly all the days were still—seemed to resound through the entire row in which the knocker was knocked. On the brass plate there was

inscribed in black letters,

MISS MINCHIN'S  
SELECT SEMINARY FOR YOUNG LADIES.

【藤井白雲子訳『小公女』】

《薄暗い冬の或る日のこと、黄色な重苦しい濃霧が、どんよりと倫敦の街衢を罩めて、家々には洋燈が点され、店舗の硝子戸は、丁度夜間のやうにキラ／＼と瓦斯の光に輝いて居る時、妙な顔容の、小さな少女さんが、お父さんと一緒に、一頭立の馬車に乗つて、徐かに大通りを駈させて居ました。

其の少女さんは、腰掛の上に座つて、お父さんの腕に自分の身体を凭せながら、大きなは、ツちりとした眼に、妙にま、せた思慮深さうな色を浮べて、馬車の窓から往來の人を凝然と眺めて居ました。

この少女さんは、實際未だ眞の子供なので、那樣年の往かない子供が、這麼にま、せた顔容をして居ようとは、何人も思ひ懸けない位なものでした。名はセーラ・クルーと云ふので、成程一寸見た処では、十二歳と云つても可い位でしたが、本当は辛と七歳になつた許りなものでした。實際セーラは常も心のうちに、子供に似合はぬ種々なま、せたことを想像つたり考へたりして居たので、暇さへあれば、大人に關係したことや、大人の活動して居る浮世のことなど、種々なことを考へ考へして居たんですから、セーラにとつては、七歳になる今日までの年月でさへ、余程永い永い間のやうに感じられるのでした。》

Once on a dark winter's day, when the yellow fog hung so thick and heavy in the streets of London that the lamps were lighted and the shop windows blazed with gas as they do at night, an odd-looking little girl sat in a cab with her father, and was driven rather

slowly through the big thoroughfares.

She sat with her feet tucked under her, and leaned against her father, who held her in his arm, as she stared out of the window at the passing people with a queer old-fashioned thoughtfulness in her big eyes.

She was such a little girl that one did not expect to see such a look on her small face. It would have been an old look for a child of twelve, and Sara Crewe was only seven. The fact was, however, that she was always dreaming and thinking odd things, and could not herself remember any time when she had not been thinking things about grown-up people and the world they belonged to. She felt as if she had lived a long, long time.

以上の文章をみてもわかるように、原作の *Sara Crew* と *A Little Princess* の間には、書き出しの部分からかなりの違いがみられる。双方ともに、ミンチン先生の私塾に預けられることになったセーラが、父親の死を境に、先生や生徒から冷たい仕打ちを受けるという話の大筋において変わりはないものの、細かい部分では、かなりの違いがある。その違いを一言でいうならば、*A Little Princess* は *Sara Crew* を敷衍拡大したものであるということができるだろう。先ほど説明した双方の作品の成立経過からもわかるとおり、前者は後者をよりドラマティックに、より観客受けするように手を加えてなった作品ということができるのである。しかし *Sara Crew* は *A Little Princess* の単なる下書きであったわけではない。*A Little Princess* に比べると話の筋も単純で、登場人物の数も限られているが、そこに備わる美点は大体において *Sara Crew* のなかにも見てとることができるのである。人形のエミリーを唯一の友としながら、さまざまな艱難辛苦に堪え忍ぶ姿や、空腹に苦しむセーラが、道で拾ったお金で買ったパンを一つを残してすべて物乞いの女の子に与えてしまう話、さらにはセーラの住む屋根裏部屋に赤々と灯がともってごちそうがテーブルいっぱい並べられているというミステリアスな出来事も、ちゃんと描かれている。そのごちそうを用意したのが隣に住むインドの紳士であることがわかり、その紳士が父のかつての友人でセーラを探している人物であったということが判明して、セーラの苦難に終止符が打たれるという結末も *A Little Princess* と変わりはない。さらに、この物語の重要なポイントである主人公の内面描写に關しても、空想癖の強い内省的なセーラの主観を通して周りの状況を描いていくという手法が、*A Little Princess* 以上に一貫してつらぬかれているし、「非常に強い想像力をもって」生まれたセーラが孤独に耐えながら心に描いてみるさまざまな空想にもそれな

りのリアリティーが備わっている。要するに、Sara CrewはA Little Princessのエッセンスであつて、決して単なるあらずじではなかつたのである。

この最後に述べたセーラの内面描写ということは若松賤子の翻訳の特徴を考える上で大変重要なポイントだと思う。賤子の「セイラ、クルーの話」には、明治期の他の児童文学作品にはあまりみられない種の精神性が備わっている。その精神性は、主として、原作のSara Crewが主人公セーラの独白や内面描写を中心にストーリーの展開がはかられていることによるものだが、それを平易な口語文で忠実に再現した彼女の「セイラ、クルーの話」にも、したがつて、この時代の児童文学作品には稀といつていいほどの高いレヴェルの精神性が備わる結果となつている。たとえば、セーラが人形のエミリーを相手にさまざまな空想を働かせる次の場面は、そうした独白や内面描写が創り出す、この作品特有の精神的雰囲気伝える端的な例といふことができる。

「此児は非常に強い想像力をもつて居り升た。セイラといふ人間よりか、此想像力の身が嵩かさにして多いかと思はれる様でした。それで此児の託たくしい孤独な幼児の生涯は、丸で想像の外で固めた様でした。自分が物ことを想像したり、ないことをある真似をしたりする中に、段々本当だと信じる様になり、どんな不思議なことが不意に起つても、一向いふ口くちかることはあるまいと思はれる位になり升た。それ故、人形のエメレが、自分の困難を、残らず承知して居る、本當に自分の友だちだと、一心に思ふふとして居升た。時々独り言に、こんなことをいつて居升た。

返事をしないで、わたしだつて、滅多に返事しやしない、返事しないで済すまさへすれば、しない様にして居るわ。人が馬鹿にする様の中には、一言もいわないが何より好いんだもの。たゞゾット見詰めて、考へてやるの、さういふ時、ミンチン先生は怒つて真青におんななさるし、エミリヤさんや、生徒たちは、おつかなさうな顔をするは、なぜかといふと、自分たちより、こつちが何だか、強ひ心持がするんだわ。……敵に、なにも返答しないが一番好い、だからいつでも返答しやしない。さふ思ふと、ヒョットしたら、あたしが、あたしの様よりか、エメレはまだあたしの様なんかも知れないよ。敵処じやない、友だちにも話すのが否なのかもしれない」だから、何もかも自分の心んなかへしまつて置くんだらう。」

このように主人公の主観を通して周りの人物や状況を描いていくという手法は、作品の最後に至るまで崩されることはない。主人公セーラが経験した激しい人生の浮き沈みを、終始一貫その主人公の心をよぎった考えや空想を通して描いてゆくというこの方法は、「セイラ、クルーの話」に備わる最も顕著な特徴であり、その特徴こそが、そこに描かれている通俗的な物語を、単なるシンデレラストーリーとは違う、高い精神性を帯びた文学作品に変えている第一の要因である。物語の後半の最大の山場ともいえる、物乞いの女の子にやっとなりついたパンを施してやる場面、そしてそれに対する天の報酬ともいふべき屋根裏部屋に用意されたごちそう、さらにはその贈り主が父親のかつての親友であったことが判明し、彼女の苦難に終止符が打たれるという結末、そうした一連の物語の経過は主人公の内面描写と一体となっはじめて深い精神的な味わいが生じるということが出来る。その内面描写こそが、この作品をして単なる子どもの読み物とは違う、大人が読んでも充分に楽しめる文学作品となしている最大の要因である。

もちろんそうしたストーリーを考え出したのは原作者のバーネットであり、その第一の功績はバーネットにあるといわなければならぬ。しかし、バーネットが自らの少女時代の体験をもとにして描いたというこの精神的ストーリーを、彼女同様起伏に富んだ人生経験を有し、彼女同様豊かな文学的資質に恵まれた若松賤子が訳出したということには、それなりの意義を認めなければならぬだろう。賤子の優れた文学的センスなくしてこのような作品が翻訳の対象として選出されることはありえなかつたらうし、彼女のずば抜けた英語力・日本語表現力なくして、このような平易流麗な口語訳が生みだされることもなかつたと思われるからである。明治二十年代の文学や文章を取りまく状況を考えた場合、彼女は、日本の近代文学を欧米諸国の文学のレヴェルにまで引き上げるうえで、なくてはならない文学者の一人であったということになる。

それに対して、藤井白雲子の『小公女』（聚精堂刊の単行書）のほうはどうかというのと、こちらも平易な日本語によって書かれた、それなりの水準を保った翻訳であったということが出来る。ところどころに「考へ考へして居たんですから」、「云ひ云ひするのです」というように、若松賤子の口調を想い起こさせる表現がみられるところをみると、かなり賤子の翻訳を意識した作品ではなかつたかと思われる。坪内逍遙が巻頭に寄せた序文にも、「御訳拝見致候、若松女史のに比して遜色なき好訳筆、これならば、如何な幼年者にもよく解り申すべく、又詞づかひ上品なれば、いつ何処にて誰の前に朗読するも差支へなかるべしと存候」と、賤子の翻訳と対比するかたちでその長所が述べられている。筆者もその伝に倣って、「セイラ、クルーの話」との比較のうちに特



徴を略述すると、まず、白雲子の『小公女』は、賤子の翻訳同様「如何な幼年者」にもわかる平易な口語文でつづられた真に児童のための文学作品であったことができる。十九章からなる原作を省略なしにそのまま忠実に翻訳しているという点において、あるいは細部の文章を翻訳する姿勢も原文の一字一句に充分な注意を払っている点においても、大いに評価されなければならない翻訳であろう。ただ、若松賤子の翻訳と比べると、主人公の内面描写に基礎をおく精神性というものがいまひとつ伝わってこないような気がしないでもない。しかし、それは白雲子の責任というよりは、むしろ原作の問題ということができるだけだろう。「セイラ、クルーの話」をドラマ化したものをさらに手を加えてストーリーを組み立てるといふ原作に与えられた手直しそのものが、すでに主観を客観へと転換する原作者の意図のあらわれであったということができる。主人公の独白や内面描写を中心とする物語を、登場人物の会話中心の物語に変えたということは、やはりそこからある種の精神性をそぎおとす結果につながったとみていいだろう。主人公の心の裡に展開される内面のドラマが影を潜めた反面、人間同士の交流や対立が繰り広げる外面のドラマの様相が一段と強まった。その結果、この作品は読んで面白い作品から、観て面白い作品へと変身を遂げることになったのである。原作の出版から百年近くを経た今でも、アニメドラマなどに取り上げられて子どもたちの人気をさらっているゆえんである。

ともあれ、若松賤子、藤井白雲子という優れた翻訳家たちのお陰で、日本の読者は原作の出版される直後から「セイラ、クルーの話」、『小公女』というそれぞれの特徴を有する二様の物語を享受することができたのである。